

さらなる前進を—創刊100号に寄せて—

昭和59年に設立された当財団が機関誌 TRAFFIC&BUSINESS を発行したのは翌60年8月のことでした。機関誌は財団の活動を広く世間に伝える広報の役割を果たすものであり、いわば財団の顔でもあります。その充実を目指して、当初は学界の大御所である先生方に編集顧問をお願いしていましたが、昨今ではもっぱら経費の節減、業務の簡素化により主として当財団の総務部が窓口となり、専務理事、常務理事、各部の担当者が一致協力してその任に当たっております。ある意味では、この実情に道路分野を取り巻く時代の変遷といったものが読み取れるともいえましょう。とはいえ、当財団としての機関誌の位置付けの重要性、役職員を中心とした編集への積極的な取り組み姿勢には何らの変わりはありません。

粛々と発行してきました中で、今回が100号という節目を迎えました。記念すべき区切りを迎えられたこと自体にも大きな意義があると考えています。一般に「100」と言えば、「数の非常に多いこと」(岩波国語辞典)が意味されます。ここで数を号数と捉えますと、季刊誌であるだけに、絶対量としては「非常に多い」とは言い難いのかも知れません。しかし、この間の道路交通を取り巻く情報・通信の世界での技術進歩はまさに「非常に多い」のです。例えば、数年前に出されたITS関係の書物では触れられていなかった新たな状況が続出しています。当財団では国際的な視座を踏まえ、その動向に可能な限り早く取り組み、精力的に調査・研究を続けてきております。成長途上ではありますが、シンクタンクとして最先端を走っているとの自負もあります。本誌でその成果等を皆様に的確にお伝えし、忌憚のないご意見・ご批判を頂戴することに留意してきましたが、当財団の意気込みと実績は皆様にはどのように読み取っていただけたのでしょうか。当財団が主要なテーマとして取り組んでいるITS技術は、単純化して言えば、人を中心とした自動車と道路の双方向での交信を基本としております。「双方向」ということに準えて、読者の皆様と当財団との相互の意見交換に本誌を一層充実、活用していきたいと願っております。

「道路はすでに十分整備された。今後の道路整備は最小限で良い」との主張が少

なくありません。確かに、官民挙げての努力により、道路資本ストックはかつてよりは蓄積されてきました。それに応じて道路関連産業も成熟してきたと言われましょう。しかし、無駄の排除—その際、「無駄」さらには「無駄な道路」とは何かを定義することが強く要請されます—を当然のこととして、現状に甘んじたままで良いのでしょうか。従来タイプの道路でも環状道路の未完、生活道路の不備、ミッシングリンクの存在等から十分整備されたとは言い難いと考えます。ましてや、これからの道路は従来タイプのものとは機能が異なっていきます。ITSを代表とする新技術を開発・普及させる余地は決して少ないどころか極めて大きいものと思われまます。質の高いモビリティの確保は開放型経済の現代社会にとって必須のものなのです。従来指摘されてきた道路交通の影の部分克服でき、夢を実現させる技術を一般化することは大いに意義のあることだと考えます。これに関連する道路新産業の一層の発展に期待される場所は非常に大きく、たとえば直近でのスマート・ドライブスルーの実証実験には多くの耳目が集められています。今後は多くのケースでより一層の具体化に寄与することが当財団の調査・研究の基本であり使命であると考えております。

TRAFFIC&BUSINESSはそのことの発信に鋭意努めていきます。そのためにも皆様方のご意見・ご批判は欠かすことができません。100号という節目で当財団の組織を上げて気持ちも新たに取り組む覚悟でおりますが、皆様方のお声を是非ともお寄せくださるようあらためてお願い申し上げます。

平成24年7月
理事長 杉山 雅洋